

双六

壽語録

壽語録



長谷川由美子



すごろく すご六 双六 双録

双語六 壽語録 壽娘録 壽古録

壽古六 壽語録 壽語六 壽吾陸

壽古六 壽古呂久 壽護録

すべて「すごろく」と読むが、一番一般的な漢字は「双六」であろう。

「双六」は「振り出し」から始めて「上がり」までをさいころを振って出た数だけ前に進む、という昔の子供の遊び道具。当館所蔵の絵双六は3点あるが、すべて当時流行っていた歌の歌詞がそのまま使われている。ウタを覚えさせる補助手段でもあった。

ここでは「軍歌」が題材になった『小學教育軍歌壽語録』と『征清大勝利軍歌壽語録』を紹介しよう。

小學教育軍歌壽語録

『小學教育軍歌壽語録』●貴重書 (尾関トヨ、明治25年10月 85×49.5cm)は錦絵の技術が生かされた彩色版画である。現在では美術品として鑑賞されるかもしれない。

15の絵が4段に別れて描かれ、それに合致するウタの言葉(詞章)が一緒に彫り込まれている。詞は鎌倉時代末期に後醍醐天皇を助けて幕府を倒す計画に加わり、また、負け戦とわかっていながら天皇のために戦った当時の軍師父子の「楠正成」「楠正行」を主題としている。「皇国史観」を小学生に刷り込ませる上にも、昔の英雄を讚美する上にもこの父子は格好の題材で、明治時代の歴史教科書では必ず取り上げられ、軍歌集の題材としても3本の指に入るほど頻繁に登場する有名人であった。

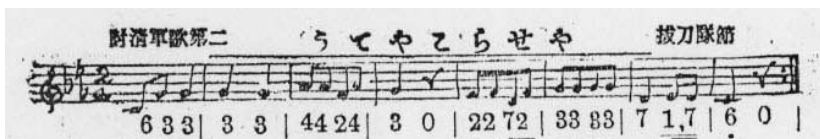
双六に使われた詞は3篇あり、2篇は明治19年出版の『軍歌』(有則軒)収録の《楠正成櫻井驛に於て正行へ遺訓の歌》と《小楠公を詠ずるの歌》、1篇は明治20年出版の『古今戦争歌』(吉澤富太郎)収録の《千劍破の合戦》である。《楠正成櫻井驛に於て正行へ遺訓の歌》だけは、複数の旋律がついたが、いづれも短命に終わっていて、長く歌われる事はなかった。小学

6年生程度を想定して作られた双六は、ルビが振ってあるとはいえず、読むのは結構むずかしい。

征清大勝利軍歌壽語録

次に紹介する『征清大勝利軍歌壽語録』●貴重書(長谷川常次郎、明治27年12月 47×60cm)は明治27年に勃発した日清戦争が題材である。日清戦争以前と以後では軍歌の詞の性質が変わる。開戦以前の軍歌集では「楠正成」などのように歴史上の人物や、忠君愛国を強く押し出した詞が多かったが、開戦以降、実際の戦闘をまるでニュースのように詞にした軍歌が大半を占めるようになった。軍歌は具体的な戦闘状況の描写と速報性という報道メディアとして機能したのであった。大量出版される軍歌のために紙の値段は上がり、また、清国蔑視の歌詞は売れに売れて、板元は「再版再版で主人は大黒顔の悦び」と報じられたほどだった。双六の題材となった

のは4種の詞から成る《討清軍歌》、あるいは《征清軍歌》の第一番《膺てや懲らせや》で、日清戦争時の有名な軍歌であった。開戦は明治27年7月25日だが、直後の8月には楽譜を伴って出版された。絵双六の出版は同年12月で、戦争の最中に急いで製作したと思われる粗雑な作りである。32に仕切られた枠に詞章が細分化されて配置されている。詞につけられた旋律には元歌がある。元歌の詞は『新體詩抄』(丸屋善七、明治15年8月)に取められた《抜刀隊の歌》(外



《討清軍歌》請求記号●F12-325

山正一詞)で、西南戦争時の西郷隆盛を歌った歌である。《ラ・マルセイエーズ》と《ラインの護り》(Die Wacht am Rhein)当時のドイツで国歌の代わりとして歌われ、ヒットラーの第三帝国時代にも第二国歌として使われた曲)を参考に作られた。この詞が明治19年出版の『軍歌』(有則軒)に転載され、さまざまな同様の出版物に再録された。

曲は陸軍軍楽隊のお雇い教師であったフランス人のルルー(Charles Leroux)が作曲、明治18年7月の鹿鳴館の演奏会で歌ったとされている。旋律は16小節にわたる繰り返しのない長いもので、最初に現れる6度音程の跳躍



『小學教育軍歌壽語祿』*当館貴重書

といい、めまぐるしく変わる調性といい、ルルーのきびしい訓練を何ヶ月かにわたって受けた軍楽隊員以外には歌いこなすことが出来なかつたと思われる。当時の新聞は曲の感想を「頗る面白く」と伝えているが、総勢80人の合唱隊に喇叭の伴奏を伴った派手な演出のために、聞く分には「頗る面白」かつたのであつて、軍歌として一般に歌われることを想定して作られたわけではなかつた。「當時の兵卒の語り物としてはあまり高尚に過ぎたので、各隊適宜に節附けをして用いて居った。・・・簡単な二節繰り返し位なもので歌はれてゐたのであつた。」と当時の音楽事情を綴つた回想録は記す。正岡

子規は「・・・無学の兵士と小学の生徒は猶彼抜刀隊の歌を以て無上の名作と為すに非ずや」と記し、国木田独歩は「われは官軍わが敵は『抜刀隊』の歌いだし』てふ没趣味の軍歌すら至る處の小學校生徒をして足並み揃へて高唱せしめき」と嘆いたが、高名な文学者が何と言おうと、難しすぎて歌えなく、旋律が歌い崩されようと曲は一世を風靡したのであつた。その旋律が日清戦争時に再び浮上して双六の題材になつたのである。

その10年後の日露戦争時、同じ曲は《征露軍歌》として再度復活する。日露戦争時の多くの軍歌は西洋曲からの旋律を借用した曲が非常に少なく、ほとんどが日本人の旋律による。これが関係したのかどうかは定かではないが、《征露軍歌》はもはや日清戦争時に『討清軍歌』が流行したほどの力は持ちえず、出版された事実のみを残して短命に終わった。

「唱歌校門を出ず」とはよくいわれることだが、その逆に軍歌はたやすく校門に入つていった。明治期に出版された軍歌集には「教科適用」、「教育軍歌」、「生徒必携」、「小學校教育」等学校教育に関する言

葉を持つた出版物が多く現われた。また、「軍歌」という用語を付さない唱歌集にも、詞が「軍歌調」である曲は非常に多い。現代に生きる私たちは、かつて軍歌が子供の遊び道具の題材や教科書に載るような時代があつたことを、単に歴史的事実としてさりと受け流すのではなく、重く心に受け止め、再びこのような時代が来ないことを心から願つて、一人一人がそのために努力すべきであろう。

参考文献

- ◆加藤康子・松村倫子「幕末・明治の絵双六」国書刊行会、2002(請求記号●J117-606)
- ◆「歴史教科書総解説」『日本教科書大系近代編 第二十巻 歴史(三)』講談社、1904(請求記号●J40450)
- ◆鈴木鼓村「耳の趣味」左久良書房、1913(請求記号●00816)
- ◆赤塚行雄「新體詩抄」前後—明治の詩歌學藝書林、1991
*当館所蔵なし
- ◆堀内敬三「日本の軍歌」日本音楽雑誌、1944(請求記号●J96047館内閲覧)
- ◆中村理平「洋楽導入者の軌跡」刀水書房、1903(請求記号●C57-191他)
- ◆細川周平「西洋音楽の日本化・大衆化」『軍歌』[Music Magazine] Vol. 21, No. 14, 1989, p.94-99.(請求記号●P763/21/14)

●はせがわ ゆみこ《膺てや懲らせや》はビゼー作曲のオペラ『カルメン』中の〈アルカラの竜騎兵〉とよく似ている。時々こんがらがる。